

担任のコントロールが効かない学級にならないように、4月から慎重かつ時に「厳しく指導する。自然発生的な仲良しグループの中でも、問題行動や逸脱行動を取る子どもが出現する。この出現により、学級のコントロールが効かなくなったという類の話は、結構聞いてきた。あの子に他の子どもたちが従い、担任の言うことは渋々するか、無視をするかのどちらか。」などは、分からない話ではない。

しかし、学級の中の多くの子どもたちが、担任の指導に納得しない結果であることに案外気付いていない。Aくんの影響力の源泉は、Aくんにあるのではなく周囲の子どもが与えているということも考えてほしい。担任に逆らって学級経営に支障をもたらしているように思える場合も、その子を取り巻く他の子どもや我関せずの子ども、中間的な行動をとる子どもがどのように考えているか把握することが決定的に重要なはずなのであるが…。一部の子どもが力をもつという場合、その力は本人のもののように思えるが、集団のもっている力の行使を一時的に任されており、集団の支持があると考えたい。

・教師の指導力を見ている。
・納得のいく指導内容であること。

子どもたちをコントロールする簡単な方法は、教師の力・威圧によって抑えることであり、「先生が怖いから、言うことをきく」という状況をつくり出すことである。これは、「正しいから従うのではなく、力に対して従う。」という間違った価値観を子どもたちに植え付ける。そのまま対人関係や集団への処し方として、「力」に対する服従を学習してしまう短絡的で、最も危険な方法である。(教師の威厳とは違う)



生活向上をめざす係を決める

では、どうすれば担任の指導が行き届き、学級が向上的にまとまっていくかである。まず、よりよい学級にしようとする気持ちを育みたい。そのためには、子ども一人ひとりを大切にすること、どこまでも子どもを信頼することを基本にし、全教育活動において、子どもたちが自分の言動を考えたり判断したりできるようにしてほしい。「困ったときに、親身に考えてくれる。」「問題が起きたときも、納得のいく決着をしてくれる。」など、教師は子どもからの信頼を得ることが大切である。

※「みんなちがってみんないい」という共生の精神を育むことにつながる。(みずき教育)

学級で起きた問題は、担任・担当が困るのではなく、子どもたちが困るようにすることである。子どもたちが自分たちの問題として感じ、それを解決できる集団として、委ねてみたい。例えば、授業の準備や開始時刻が守られない場合も、守るために何をすればよいか、一度は話し合わせたい。現時点での解決策を導き出させてほしい。子ども一人ひとりが、いろいろな形でよりよい学級づくりにかかわらせ、自分の学級に所属しているという帰属意識を育てたい。低学年から、自ら考え判断できる子どもも育成する気持ちを忘れまい。

特に、叱る時は細心の注意を払ってほしい。叱る時は、全員の前ではなく、できるだけ本人一人にするとともに、何がいけないのか叱る内容を子どもに理解させてほしい。1%でも正しい部分があれば、その正しい部分は認めたうえで、正しくない99%を注意したい。叱られた内容が理解できなければ、嫌な気持ちが残るだけではなく、怒りや恨みと変わる。また、これまでのことや関係ないことを持ち出すことは、厳に慎むことは自明である。(芝)

・短時間で叱ること
・子どもの親にも説明できること
・子どもの思考や言動の傾向を把握しておくこと